

生活科における気づきを深める3つの試み
～カリキュラム・マネジメントの考えを活用して～

横井成美（名古屋市立高針小学校教諭）

Key Word 深い学び，カリキュラム・マネジメント，成果の見える化

1. 実践の契機

いつもはゲームの話ばかりしている児童たちが、偶然飛来してきた本物のチョウに興味をもち観察を続けていた。すると、チョウの形状や動きの神秘さを口にし始めた。さらに探究心を深めようとする態度も見られた。この様子から、「本物を継続的に観察することは、主体的に深い学びに向かおうとする子どもを育てるのではないか」「継続的な観察を行うために、生活科だけでなく他の学習の異なる視点からアプローチすることで、より深い学びに導くことができるのではないか」という2つの仮説のもとで、以下の手立てを用いて授業実践を行った。

手立て1. 本物に触れることで、親しみや慈しみの心情を育てる
手立て2. カリキュラム・マネジメントで他教科と関連させる
手立て3. 成果の見える化を図る

2. それぞれの手立てに関わる実践記録

手立て1. 本物に触れることで、親しみや慈しみの心情を育てる

本学級では、虫好きの児童を中心として、昆虫が教室に持ち込まれていくようになった。しかし、以下の2つの現状を克服しなくてはならなかった。

(1) 「虫を怖がって、近寄れない現状」の克服

生き物を持ち込む児童と生き物に近寄れない児童とが2分していた。生き物を持ち込んだ児童が「生き物先生」となり、生き物の面白さを他の児童に伝授させていったが、それだけでは、虫嫌いの児童を減らすことはできなかった。そこで、普段から活動と一緒にいるペア学年の1年生に「学校内にいる虫のことを教える」という目標をもたせた。すると、積極的に「生き物先生」に虫について教えを乞う姿が見られるようになった。これを契機に昆虫をよく観察するようになり、命について考え、生態の面白さに気付く児童が増えていった。全児童がペアの1年生のために虫を採取したり、虫のすみかを説明したりできるまでになった。1年生からのお礼の手紙をもらうことで、さらに生き物を調べて、分かったことを休み時間に教えに行くほど興味関心を高めた。

(2) 「虫かごの中で餓死させる現状」の克服

学級の「生き物先生」に採集した場所を詳しく説明してもらい、採集した場所と同じ環境を作るように促すと、透明なケースに土

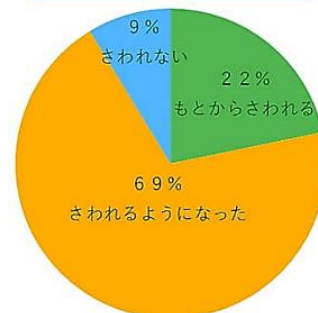
を入れ、根がある植物をその中に植えてバッタを飼育しだした。また、生き物がいた場所の草を採集し、実際にどれを食べるかを比べて児童自身で食草を突き止めていった。

さらに、明るい方へ引き寄せられるチョウの習性に気付き、南の窓際に餌を置くことも児童自身が考えだすことができた。

〔手立て1の考察〕

1年生に教えるというインセンティブがあったことで、改めて生き物を見直し、今まで気付かなかった事象にも気付く児童が多かった。資料1のように昆虫にさわられるようになった児童が増えた。

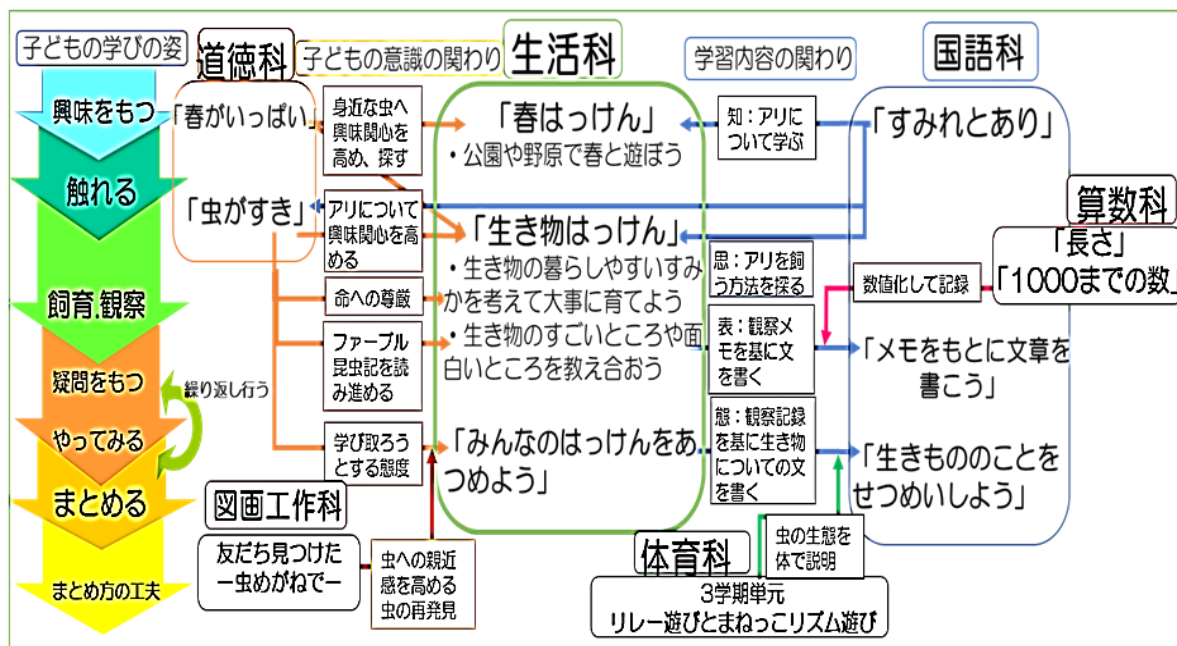
昆虫に触れますか 7月



資料1 学級実態グラフ

手立て2. カリキュラム・マネジメントで他教科と関連させる

本物に触れ、虫に興味を示す児童が増えたが、恐怖心を抱く児童はまだ多かった。そこで、多様な視点もてるように生活科の生き物の単元を軸にして、資料2のように各教科間の関連性をとらえ直し、効果的に学習を行う方法を考えていった。



資料2 生活科を中心とした他教科単元との関わり

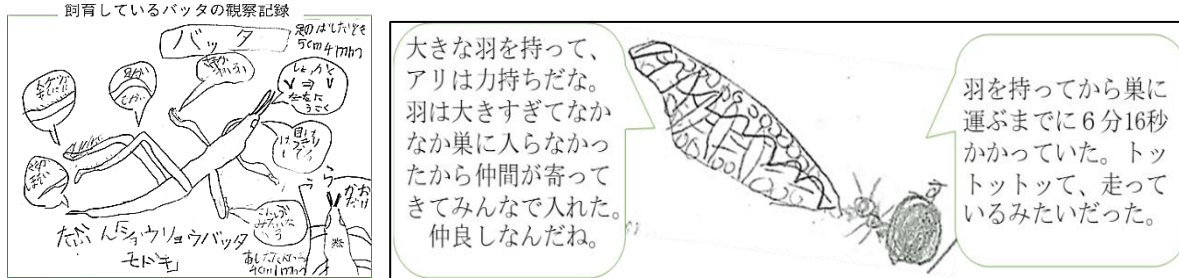
〔生活科と道徳科との関わりの効果〕

道徳の自然や命を考えさせる教材を学んだ後、生き物の生態の特徴を生命維持と結び付ける考えや、採取した命をつなぐことに思いを馳せ、雌雄で飼育する考えなどが生まれた。道徳的価値観を内包できただけでなく、行動に結びつけることができた。

〔生活科と国語科との関わりの効果〕

国語のアリの生態の説明文に刺激を受け、身の回りのアリを観察し始めた。「何種類いるのか、何を食べているのか」と児童自身がテーマを決めて確かめた。また、国語での文章表現の学習を通

して、観察したことを図解入りで説明する児童が増えた(資料3)。



資料3 観察記録

〔生活科と算数・体育とのかかわりの効果〕

国語の説明文を書く単元、体育の生き物の動きをまねする単元では、虫の動きや生態を知るために様々な方向から観察した。新たな疑問は、自ら図書で調べた。行動の意味や生息域など今までと違う視点からのアプローチで学びを深めることができた。

〔手立て2の考察〕

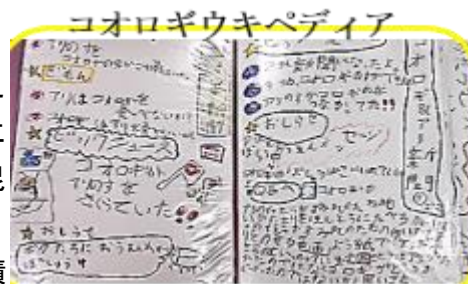
他教科の単元から興味関心を高め、児童自ら成長の記録を数値化していた。また、自ら図書で調べたり家族で飼育して検証したりする児童も出てきた。以下のような結果を導くことができた。

グループ	飼育方法	観察した事実	児童の気付き
バット	自然の状態に近い状態のため土と根をつけた草を入れた	バットが土に尻を差し込み、ガラス越しにオレンジの卵を産む様子を見ることができた。	敵から卵を守るため、土と似た色になるように初めからオレンジの卵を産むのではないかと。
カマキリ	透明なケースに隠れる草や餌となるコオロギを入れた	普段は獲物は首を一撃して頭から食べるが、卵をもったバットは腹から食べた 泡と卵を交互に産んだ。 卵を産みそうなカマキリが途中で死んでしまう。	栄養のあるところから食べ始める。途中で誰かにとられてもいように一番いいところを先に食べる。 卵を守るため泡と交互に産んで優しく包んでいる。 腹を開いて卵の数を数えた。多くの卵があるのは、たくさんの敵がいるから。
コオロギ	土を入れて自然に近い状態で飼育	キュウリを食べることを発見。しかし、餌が腐ってしまう。	毎日新しいキュウリの輪切りを与え、1日に食べる分を見つめる
チョウ	花瓶に挿した食草を与えて幼虫から飼育。	チョウによってさなぎのなり方が異なる。 上をむいてさなぎになる、ぶら下がってさなぎになるものがある	逆さになるツマグロヒョウモンの後ろ足の吸盤は強い。 さなぎになった時に落ちないため

手立て3. 成果の見える化を図る

継続的な観察や実験で得た知識を伝えたいという児童の思いを実現するために壁新聞や虫ペディアと名付けた自作の昆虫図鑑を作って図書室に置いた。

他学年の児童に昆虫図鑑を広げて、積極的に説明する姿も見られた。



資料4 児童の作った昆虫図鑑

〔手立て3の考察〕

自分自身が実践を振り返り、活用できるような成果の見える化によって、既存の知識共有し、だれもがそれを土台にして次のステップへ興味関心が広がっていった。そのため、児童の制作した図鑑「虫ペディア」は、児童が実験をして新たに分かったことを増やしたり、検証した結果が以前と異なった加除訂正したりできるような差し込み型の冊子を用いた。やってみた結果が目に見えることで、他者に説明したり、活用してもらったりすることを実感することができた。

3 おわりに

生活科の生き物を扱う単元の目標を達成するために生き物への恐怖心を取り去り、興味関心を高め、児童自身が追求する深い学びを実現するプロセスの一考を示した。本実践は、生活科の枠にとどまらず、以下のように3つの手立てを低学年の学習内容で一般化することができる。

3つの手立て	一般化した考え
本物を見せる	多様な考え方の構築 具体的な事象を五感で味わう経験を多く積むと、物事の結果の揺らぎをあらゆる現象を加味しながら捉えることができるようになる。 気付きから不思議さを解明しようとする科学的な視点をもつことができる。 情緒が豊かになる 懸命に命を育てている姿を実感でき、自分事として捉えることができる。
カリキュラム・マネジメント	学習目標にブレがなくなり、学習効果が上がる 児童自身が目当てを見付けやすい。自分から既習したものを活用しようとする。 各教科をつなげていくことで、時間数の節約になる。
成果の見える化	児童が成果を元に次の考えに広げていきやすい 自分の記述から、まだできていないこと、もっとできることを探しやすい。 文や図による説明表現のスキルが上がる 掲示、製本することにより、他者の目を意識し、よりわかりやすく文章や図を書く動機付けになる。

資料5 3つの手立ての一般化した表

新しい学習指導要領に児童の主体的な学習を促すためには「学習の対象にじっくりと安心して関わることのできる心理的な余裕をもつこと」「自分なりに対象と関わり、試行錯誤したり繰り返したりしながら感じ考え、活動を持続していく受容的な環境が求められる」とある。必要な時間数の確保と基本方針でうたっている様な知的な気付のためにもカリキュラム・マネジメントは大いに必要がある。しかし実施するにあたり、学校全体で取り組める体制を整えていかなければならないと、実践を通して強く感じた。

〈引用・参考文献〉

奈須正裕 2019, 「地域の変化や特質を踏まえたカリキュラム・マネジメントと子どもの学び」日本学校教育学会編『学校教育研究』No. 34, 213-217項。小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説生活編, 73-74項。